

ひかりの国のタッシンダ

エリザベス=エンライト作

久保田輝男訳



昭和四十三年八月十五日 初版発行

NDC 933

エリザベス=エンライト作

ひかりの国のタッシンダ

新しい世界の童話シリーズ・35

訳者の、解により検印廃止



訳者 ■久保田輝男

発行人 ■古岡秀人

編集人 ■石井和夫

本文印刷 ■信毎書籍印刷株式会社

オフセット印刷 ■株式会社恒陽社印刷所

製本 ■株式会社国宝社

発行所 ■株式会社学習研究社

東京都大田区上池上 264

振替東京142930

G 024-335

落丁・乱丁本はおとりかいたします。

定価
四二〇円

ひかりの国のタッシンダ

エリザベス=エンライト作

久保田輝男訳

イリン=ハース画

TATSINDA





ひかりの国のタッシンダ もくじ

5 ひかりの山^{やま}トラジャン

24 山^{やま}の魔法^{まほう}つかい

49 やみの国^{くに}ガドブラング

69 大男^{おおおとこ}がやってきた

デザイン・江口 進



133

チムブリルの糸いと

99

魔法まほうの粉こな

86

はじめてのたたかい

●編集委員

<50音順>

独・北欧児童文学翻訳家 大塚勇三

青山学院大学講師
英米児童文学翻訳家 神宮輝夫

国立音楽大学教授
フランス児童文学翻訳家 塚原亮一

慶応義塾大学助教授
英米児童文学翻訳家 渡辺茂男

TATSINDA

by Elizabeth Enright

Original English edition published

by Heinemann, London

Copyright 1963

by Elizabeth Enright & Irene Haas

Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle, Inc., Tokyo

●訳者のご紹介

この本を訳された久保田輝男先生は、1927年に東京に生まれ、南山大学英語科をご卒業。現在高校の英語教師をしながら、英米文学の翻訳紹介に力をつくされております。

主な訳書に『大海の反乱者』（平凡社刊）、
『怪じゅうが町へやってきた』（偕成社刊）
などがあります。

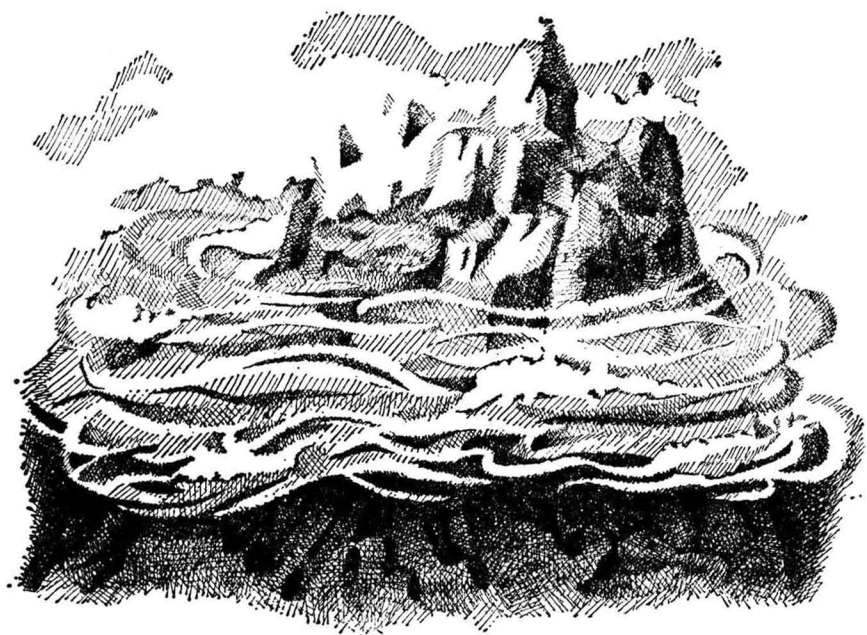
1 ひかりの山^{やま}トラジャン

むかし、とおいとおい^{せかい}世界のはての一年^{ねん}じゅうさむいところに、そこにすんでいる人^{ひと}の
ほかは、だれも知らない一つの山^{やま}がありました。山^{やま}の名^なはトラジャン、そこにすんでい
る人^{ひと}たちは、タトラン人^{じん}といいました。

たくさん^{みね}の峰^{みね}がつらなつたその山^{やま}は、とても大きく、一つの国^{くに}——りっぱな王国^{おうこく}をつく
っていました。その山^{やま}は、あたりのさびしい山^{やま}やまとはちがつて、地中^{ちちゅう}ふかく、あつい火^ひ
がもえているためか、一年^{ねん}じゅうほかほかとあたたかでした。

森^{もり}や、谷^{たに}の牧場^{まきば}のみどり、果樹園^{かじゆえん}や庭^{にわ}のみどりと、みどりの色^{いろ}もゆたかでした。ちよう
ど、しらじらとしたあら海^{うみ}のなかにぼつんとうかぶ大きなみどり色^{いろ}の船^{ふね}のように——それ
も帆^ほをいっぱいにはった大きな、みごとな船^{ふね}のように、くつきりとたっていました。

そのあたたかさはまわりの氷^{こおり}をとかし、そこになんマイルにもわたって厚^{あつ}く高い^{たか}いやの



壁をつくっていました。

しかし、このもやの壁のうちがわでは、いつも太陽がてりわたり、土地はゆたかで、花がいっぱいにさきみだれていました。

タトラン人の王さまはタガドール、おきさきはタタスパンといいました。男の子が三人いました。ターミン、タスキン、タカタンの子王子です。

タカタン王子がすえっ子で、またいちばんこわいもの知らずでした。

ところで、この山のいろいろなふしぎを一つ一つお話ししていたら、一年はか

かるでしょう。

この山の住人^{やま じゆうにん}タトラン人^{じん}には、なんのふしぎもないことが、わたしたちの目^めからみると、まったくしんじられないことはないにしても、ずいぶんみょうな気^きがするのです。

たとえば、森^{もり}や野^のの動物^{どうぶつ}のお話^{はなし}をするだけでも、なんページもかかるでしょう。ですから、お話し^{はなし}できるのは、ほんのわずかですが、なかでもかわいいのは、チムチックという動物^{どうぶつ}です。ものしずかな動物^{どうぶつ}で、ほっそりした六本^{ぼん}の足^{あし}をもち、ひづめや、つのは真珠^{しんじゆ}のようなものでできています。顔^{かお}もほっそりとしてフォックス・テリアに^にています。大^{おお}きなうちわ型^{がた}の耳^{みみ}は、さがうつくしいふ^ふさにな^なってたれていました。音^{おん}楽^{がく}のような、鳥^{とり}のような、気^きもちのいい声^{こえ}でなき、すぐ人^{ひと}にな^なつきます。

からだは小^{ちひ}さいけれど、たいへんな力^{ちから}もちで、タトラン人^{じん}の子^こどもはこのチムチックにの^のって学校^{がっこう}へいくので、みんな一^{いっ}びきずつか^{つか}っています。なかには、二^{ふた}ひきも^もっている子^こもいるほ^ほどです。

また、ほかにもいろいろな動物^{どうぶつ}がいます。

大きくて人なつつこいチプトットは、たいへんおいしいミルクをだしますが、すがたはちっともウシににず、毛のはえたヒラメといったかっこうです。これが牧場をいくときは、毛皮のふちを波うたせながらすすみますから、まるで風にはこばれるじゅうたんのようでした。

小さくて足のはやいチドエル。これは子どもたちのすてきなペットです。どこかリスにいますが、子ネコのようにごろごろのどをならし、からだは小さくて、まるめてポケットにはいるほどです。

それから、はずかしがりやで、しなやかなからだつきのチムバトックがいます。木の上を枝から枝へとわたりあるき、すこしくらいのきよりならとぶこともできます。月のあかりの夜、チムバトックは目をさまし、森の中でなき声をひびかせます。その声は、ギターのいとのひびきにそっくりでした。タトラン人は、そんな月夜の晩を「チムバトックの夜」といっていました。

まだお話ししていないものもたくさんありますが、これらの動物は、みんなおなじもの



を二つもっていました。

一つは雪のようにまっ白な毛皮で、もう一つは「チ」の音ではじまる名まえです。

(ちょうど、この山の人たちが、みな「タ」ではじまる名まえをもっているのとおなじです。)

ただ鳥のなかまには——これはまた、やたらに数がおおいのですが——どうやらわたしたちにもおなじみのれんちゆうがいるようでした。というのは、鳥だけが、この山へすきかってに出入りできる、ただ一つの動物だったからです。

タラン人にとって、この山はすてきなところでしたから、鳥がどこへとんでいこうと、そのゆくえを気にするものはありません。好奇心にかられ、山のそとへたんけんにでかけた人もありましたが、みな、あの壁の、やにまかれ、いのちをおとしてしまいました。もやには、毒がふくまれていたのです。

木や花やくだものについては、——いや、これは話したらきりがありません。ただ、わたしたちの知っているものとはちがう、とだけいっておきましょう。ふしぎで、あ

やしげなうつくしき。たしかに、わたしたちのとはちがうのです。

ちがうといえ、この王国では、また家のようすがちがっていました。山からきりだしたくもり水晶でできていて、色は、青みがかったみどり色、はい色、ばら色とさまざまです。やねは、チマルーンという鳥の、ひ色の羽であって、雨風にうたれてもすくしもいたまず、いつまでもながもちします。

家の中には、あたたかい土の上に——といって、あつすぎることはなく、ちょうどほに手をおしあてたくらいのあたたかさですが——トートルが一まいしかれています。

トートルというのは、じゆうたんとか、もうせんとかいいうところでしょうか、ちょうどわたしたちのゆか板にあたるもので、タトラン人にはなくてはならぬ品物です。どこの家にも一まいはおいてあります。たとえ、どんなにまじしくても、です。

どれもチプトットのうつくしい毛を材料に、手でねんいりに織ったものです。——チプトットの毛は、年に三かい、かりこまれます。

色あざやかなようが織りこまれ、うつくしくしあげられて、どこの家でも、わが家の

トートルをじまんにし、季節ごとに一まいずつ、いや、もつともっている家もすくなくありません。たとえば、王室などでは、百まいちかくもっていました。

さて、このお話のころ、王国でいちばんゆうめいなトートル織りの名手は、タッシンダというむすめでした。

トートルの織りかたは、いまはなき母親におしえられ、しかも、そのもようのあたらしさ、その織りめのうつくしきで、たちまち母親いじょうのうでまえになってしまいました。

タガドル王はこのタッシンダが織ったトートルを、なんまいもなんまいもお買いあげになりました。

「けっこうなことじゃよ。」と、タガドル王はいいました。「とにかく、このかわいそうなむすめも、しごとにだけはめぐまれることじゃろう。といって、わしが買ってやるのは、むすめがかわいそうだから、というばかりではないがの。」

それというのも、このタッシンダというむすめは、王国のほかの人たちとだいぶようす

がちがうのです。

たしかに、うつくしいむすめでしたが、その点で、人とちがっているというのではありません。タトラン人のむすめは、みんなうつくしいのですから。もんだいはタッシンダのかみの毛です。金色のかみの毛と茶色の目、この国では、だれもそんなのを見たことがないのです。

ほかのタトラン人——ねっからのタトラン人なら、みんな雪の結晶のような、きらきらした白いかみの毛をしていました。目はみんながみんな、氷にさしこむ光のかがやきとでもいいでしょうか、つめたい青みどり色をしていました。

それが人間の自然のすがたなんだと、人びとは思ひ、タッシンダのことをかたわのようにかんがえて、その金色のかみの毛や茶色の目をかわいそうに思っていました。

「そりやそうですとも、あのかわいそうなむすめ、だれもおよめにもらい手がないでしょうよ。」と、タタスパン女王がいました。「あのかみの毛のほうはなんとかなるでしょうけれど。チプトットのミルクでさらしてみたり、テルテルの花の花粉をふりかけてみたり

して。でも、あの目だけはどうしようもありませんわね！」

「とにかく、あのむすめにしごとがあることはいいことだ。」と、タガドール王がいいました。「あれほどのトートル織りの名手は、まずほかにはないからな。」

タッシンダのようすがほかの人たちとちがうのには、それなりのわけがあります。この国で、タッシンダだけが、この土地の生まれではなかったのです。

タッシンダは、どこか、もやのむこうの国からやってきたのでした。そんなのは、鳥のほかにはありません。じっさい、タッシンダをつれてきたのも、一わの大きな鳥でした。

十六年まえのある日、タクシネールという老貴族が、山おくふかく狩りにいったことがありました。そのとき、いきなりワシの一群がさっとこっちへとんできて、——ワシのこを、タトラン人はチングロックとよんでいましたが——見ると、そのなかの一わが二才ぐらいの女の子をひっさらっていくではありませんか。するどいつめで、女の子のマントのきれを、しっかりとつかんでいました。

タクシネール老人は、すばらしい狩人でした。ワシが頭の上にやってくるのをまち、ト



ズンダート——弓ゆみのような武器き——をかまえて、ゆっくりとねらいをつけ、もののみごとに射いおとしました。女おんなの子こにはかすりきず一つひとおわせません。その子こが風かぜをきっておちてくるのを、走はしっていって、あやうくうでの中なかにだきとめました。

「あれは、ちっともなかなかつたよ！」老人ろうじんはそのときはなしの話はなしをするたびに、きまってかんしんしたようにいいました。「あれは、わしの顔かおを見みると、につ